

明治維新について思うこと



十五代 沈 壽官

鹿児島は大河ドラマ「西郷どん」ブームの真つ最中である。本来は明治維新150年という節目の年であり、明治維新（戊辰）とは一体何だったのか熟考する年であった筈なのだが、そんなものは、何処かに吹っ飛んでしまったかのような、テレビ版西郷どんブームだ。

時代考証も怪しげで、ストーリー展開無茶苦茶のNHK版西郷どん。小生も3話くらいまでは我慢して見ていたが、藩主の養女である篤姫が下級武士である西郷に「西郷どん、一緒に逃げもんぞ」と言ったあたりから、あ

まりのあり得なさに呆れ果てて、ついに観ることもなくなった。

しかし、世の人々は大河ドラマのロケ地に続々とやってくる。お約束なのだろう。上滑りの活性化という点においては今のところ極めて順調である。ただ、あのドラマを見て「へえー、そうだったんだ」と思った視聴者も多い事と思うと恐ろしい話だ。

そこで、自分なりにあの時代を考えてみた。

薩摩は、歴史的に台風の常襲地帯であり、桜島の降灰の被害も大きい。従って、シラス台地では米が思うように収穫出来ない。更に武士の数が異常に多く、島津家による將軍家や諸方の有力大名との姻戚関係維持などでも費用がかさむ。又、徳川家から警戒されていた為、多くのお手伝い普請や遠路の参勤交代などの負担が藩財政を圧迫し、当時の庶民の

暮らしは塗炭の苦しみの中にあつたという。

そのあまりの酷さを見かねた越中富山の菓種商が幕府に進上し、藩は幕府から厳重注意を受けたこともある。

そんな中で生き残りを賭けて薩摩藩は海外へと交易の輪を広げて行ったのだ。

薩摩藩は朝鮮出兵から10年後に三千の兵で奄美の島々を蹂み潰し、琉球に到る。そして、王府首里城を陥落させて琉球国を薩摩藩の植民地とした。その辺りを皮切りに、一気に海洋国家へと変貌していく。朝鮮、清、その他東南アジアの国々がその対象である。

薩摩は国内においては、頑なに閉鎖的であつたが、アジアに対しては実に開かれた国へと変わっていった。その蓄積が、幕末期、時代を動かす原動力になつたのだ。それは、単に経済的な豊かさのみならず、北東アジアに張り巡らした情報ネットワークの強さでもあ

つた。

幕末期、欧米各国から迫られる開国要求に耐えている最中、起こつたアヘン戦争が薩摩藩指導部に強い衝撃を与える。永遠の帝国と信じていた清国がいとも簡単に英国の近代兵器の前に潰えたのだ。しかも、その開戦の理由は阿片の押し売りである。民主主義誕生の国などと言うが、その実態は極めて悪いものである。

これにより危機感を強くした藩主島津斉彬は大規模な近代化事業に着手する。こうした反応は薩摩が取り立てて開明的だったからだとは思わない。単に火元に近かつた事に起因するのだ。東北には東北の秀才が当然ながら居る。ただ、火元からは遠かつた。

斉彬は東洋最大のコンベンナート建設を開始した。しかも、外国から機械や技師を招くのではなく、参考文献のみを取り寄せ、それ

を自藩で翻訳、さらには在地の職人や士族に実行させたのだ。その領域は決して軍事部門に偏ることなく、人々の暮らしに資する全般的殖産興業政策であった。

そして、それらの備えが威力を發揮したのが薩英戦争である。

神奈川県生麦村で起きた生麦事件に端を發する薩英戦争で、薩摩は英国の優れた科学力を身をもって知ることになる。その時点で攘夷はあっさり捨てた。それどころか、優秀な16名の青少年達を偽名でイギリスに留学させたのだ。イギリスも又、そんな薩摩に強い関心を持った。

私は維新について思う時、このイギリスとの出会いが最も大きな意味を持つと思つてゐる。

インドで生まれた仏教が、中国大陸を経て

朝鮮半島から、6世紀に日本にもたらされる。当初、神道と激しく対立するも、やがて調和し日本独自の哲学に至る。天台本覚論である。「草木国土悉皆成仏」とは正に日本人だけが持ち得た哲学であろう。一方で、ゴラン高原に生まれたユダヤの一神教は当初、ギリシャ哲学と激しく対立するが、これも調和し、神の意志を証明する為の科学を作り出し、イギリスでは産業革命が起こる。

この全く異なるユーラシア大陸の西の果てのイギリスと東の果ての日本が幕末に出会い、争い、そして調和したのである。

それまでの日本人、取り分け武士階級は如何に死ぬかが絶対命題であった。切腹というのは、世界で類例のない自殺の作法である。しかし、キリスト教の教えでは、人は命ある限り生きなければならぬのだ。この死生観の違いから、日本人の若者達は初めて「生き

る事」に目覚めたのではないか?と思うのだ。避けがたい運命としての「死」に対して、如何に生きるのかを初めて問い始めたという事だ。

維新の草莽の志士たち全てが取り立てて裕福であった訳ではない。又、特別に優秀であった訳でもない。その彼等突き動かしたエネルギーの元は、時代にもたらされた「生」への渴望ではなかったか? そして、彼等のその一片の志が時代を変えた。

地勢上の違いによる感覚の違いはやがて内戦という悲劇を生む。戊辰戦争だ。その先頭に居たはずの薩摩ですら西南の役で叩き潰されてしまった。

改めて思うことは、今のように情報がスピードでなかったあの時代、高熱にうなされた様に駆け抜けた人々、それを突き動かした

パワーの元は、未知なる世界との出会いであった。

相容れないものと争い、やがて調和した時、人は凄まじいエネルギーを持てるのだと思う。明治維新が真に正しかったのか?

未だに悩ましい。しかし、日本が世界という海に飛び込み、泳ぎ切る為の一つの道であった事は間違いない。

